

史上最大の会戦



1943年1月31日、スターリングラードで包囲されていたドイツ第6軍は、ついにソ連軍の軍門に下った。「誇り高きドイツ軍の元帥は絶対に降伏しないのだ」というヒトラーの督戦を含めた思惑によって、軍司令官パウルス上級大将が、元帥に昇進した翌日のことである。そして、このスターリングラードの降伏劇により、東部戦線のドイツ軍の1942年度攻勢は、1コ軍の壊滅という悲劇と共に幕を閉じたのだった。

引き続き、ソ連軍は1942～43年の冬期攻勢によって南方部戦線に強圧をかけたが、「ドイツ軍の頭脳」こと南方軍集団司令官マンシュタイン元帥と、SS第2機甲軍団長で、武装SSきっての名将の誉れも高いハウザーSS中將による、ヒトラーお得意の死守命令を無視する作戦指導により、ソ連軍の「勢い」にストップをかけることができた。そのさいに生じたのが、ハリコフ北翼の巨大な“バルジ（張り出し、突出部の意）”であり、その中心にクルスクがあった。

1943年春、独ソ戦開始以来、ドイツの攻勢が可能となる3度めの季節が巡ってきた。ここで着目されたのが、この巨大な“バルジ”だ。

ドイツ軍は、“バルジ”を南北からその根本を食い切った上で、その包囲環の中に閉じ込められたソ連軍を殲滅することにより、東部戦線での新たな攻勢のステップ・ボードにしようと思っていた。

4月14日、時のドイツ軍参謀総長ツァイツラー將軍によって提出された作戦計画書にヒトラーが署名した。こうして作戦は正式に承認され、いかにも彼好みの“ツィタデレ（城塞の意）”という作戦名も決まり、その発動は5月初旬に予定された。

しかしその後、作戦参加部隊の装備の充足状況、新型兵器の配備状況、さらには戦況の推移といった問題によって、実際の作戦開始は、ロシアの大地に初夏の風がそよぐ7月5日までずれ込んでしまう。

一方ソ連軍側は、捕虜から得た情報やスパイ活動によって、あらかじめこの作戦の詳細を知っていた。そして、このバルジ—今ではクルスク突出部と呼ばれる—全体の外周に沿ったものと内側を細かく仕切るような形で、急ピッチで多数の縦深防禦陣地の構築を開始し、ドイツ軍の攻勢が今にも始まるのではないかとひやひやしながらも、その完成を急いだ。やがて、そんな不安をよそに、

クルスクの戦い〈1〉



ツィタデレ作戦

白石 光

8層にもおよぶ縦深な防禦陣地ができあがった。

この陣地造りの突貫作業の中から、野戦築城史上に名を残す名陣地が生まれた。“バック・フロント”がそれだ。

その名のごとく、縦深複合構造を有する陣地帯に、ソ連軍お得意の76.2mm師団砲M1936やM1939、57mm対戦車砲M1941、やや旧式化した45mm対戦車砲M1932等を、相互援護が可能で、かつ、複数の砲が同一の目標を砲撃できるように配した上、多数の14.5mm対戦車ライフル銃と、対戦車地雷等を装備した歩兵群によって補強された、強固な対戦車防衛線である。もちろん、接近路上には、各種の地雷が多数埋設されたのはいうまでもない。

ツァーの時代から、陣地構築には長けていたロシアの軍隊の特徴が、まさにいかんなく発揮されたのが、このバック・フロントといえよう。なおバック・フロントも含めて、クルスク突出部の内側には、一説では総延長10,000km以上にもおよぶ各種の壕が掘削されたともいわれている。

このクルスク突出部を守るソ連軍部隊は、北翼がロコ

ソフスキー上級大将の中央方面軍で、南翼がヴァトゥチン上級大将のヴォロネジ方面軍であった。両軍は、合計して約3300～3500輦ほどの戦車や突撃砲を装備していた。また、突出部の東側（付け根の奥）には、コーニエフ上級大将のステップ方面軍が、予備と機動打撃兵力を兼ねて配置されていた。同軍は約1500～1700輦もの戦車や突撃砲を装備して、戦線の必要な地点に、いつでも投入できる態勢にあった。

そのうえ、実際にドイツ軍が攻勢をかけてきた段階では、ソコロフスキー大将の西部方面軍、ポポフ大将のブリャンスク方面軍、マリノフスキー大将の南西方面軍といった周辺の部隊を用いて、強力な反攻に転じることとなっていた。ちなみにこれら3コ方面軍は、合わせて約4500～5000輦もの戦車や突撃砲を装備していたという。

このように、ソ連軍はまさに万全の態勢で、ドイツ軍の1943年度攻勢を迎え討とうとしていた。そして、それはひとえにドイツ側の作戦開始の遅延と、機密漏洩のために引き起こされた事態であった。

“ツィタデレ”が突出部を食い切るための作戦である以上、いわゆる上顎と下顎が必要である。この内、上顎すなわち北翼側を攻撃するのは、フォン・クルーゲ元帥の中央軍集団麾下、モーデル上級大将の第9軍だった。同軍は、第41、第46、第47の3コ機甲軍団と第20、第23の2コ軍団に合計21コ師団を擁していたが、攻撃力の要となる機甲師団は第2、第4、第9、第18、第20の5コで、他に第10機甲擲弾兵師団があったが、戦車ではなく突撃砲や対戦車自走砲が主装備だった。



さらに第9軍には、攻撃力強化のため第653、第654の2コ重駆逐戦車大隊（フェルディナント駆逐戦車装備）と第216突撃戦車大隊（ブルムベア突撃臼砲装備）を傘下に収めた第656重駆逐戦車連隊、第505重戦車大隊（ティーガーⅠ装備）等が配属されていた。



ところで、クルスク戦に参加したドイツ軍戦車の種類と数量については、今日までに発表された各種の資料の中で、さまざまな数字が示されてきた。なぜ資料によって数字にバラつきが生じるのかといえば、まさに「その時、その瞬間」のデータがなく、調査者によって出典原資料が違っていたり、あるいは調査者自身が、時期的な事情を考慮して数字に操作を加えたりしたせいである。これには、彼我双方の公式な発表数字の違いなども影響をおよぼしている。

というわけで、このようにいろいろな数字があるのだから、思い切って筆者も、敢えて恐れずに、筆者なりに調べた結果を記してみたいと思う。

第9軍の5コ機甲師団は、作戦開始4日前の7月1日の時点の合計で、各種の指揮用戦車28輛、Ⅱ号戦車18輛、Ⅲ号戦車5cm短砲身型28輛、同長砲身型52輛、同7.5cm短砲身型60輛、Ⅳ号戦車短砲身型24輛、同長砲身型237輛、38（t）9輛の合計456輛の戦車を装備していたとい

ハリコフ奪回に投入されたSS第1機甲擲弾兵師団のⅣ号戦車G型



ツィタデレ作戦を承認したヒトラー

前線で貨車から降ろされる第39戦車連隊所属のバンターD型



パンターなどと同じく、このクルクス戦が初の大量投入となったフンメル自走榴弾砲

う。

また、同軍に戦力増強のため配属された独立部隊は、フェルディナント89輛、ブルムベア45輛、ティーガーI 45輛を装備していたらしい。これに、上記の5コ機甲師団の合計である456輛を加えると、総計635輛となる。ただし、この数字には機甲擲弾兵師団所属の対戦車自走砲や、歩兵師団あるいは独立部隊所属の突撃砲や対戦車自走砲などは含まれていない。

一方下顎、すなわち南翼側を攻撃するのは、マンシュタイン元帥の南方軍集団麾下、ホト上級大将の第4機甲軍と、ケンプフ大将のケンプフ軍支隊である。

この内、第4機甲軍はSS第2と第48の2コ機甲軍団と第52軍団で、合計10コ師団を擁していたが、SS第1ライプシュタンデルテ・アドルフ・ヒトラー、SS第2ダス・ライヒ、SS第3トーテンコップフの3コSS師団に加えて、グロスドイツチュラント機甲擲弾兵師団、第3、第11の6コ師団が、機甲または機甲擲弾兵師団という充実した編成であった。

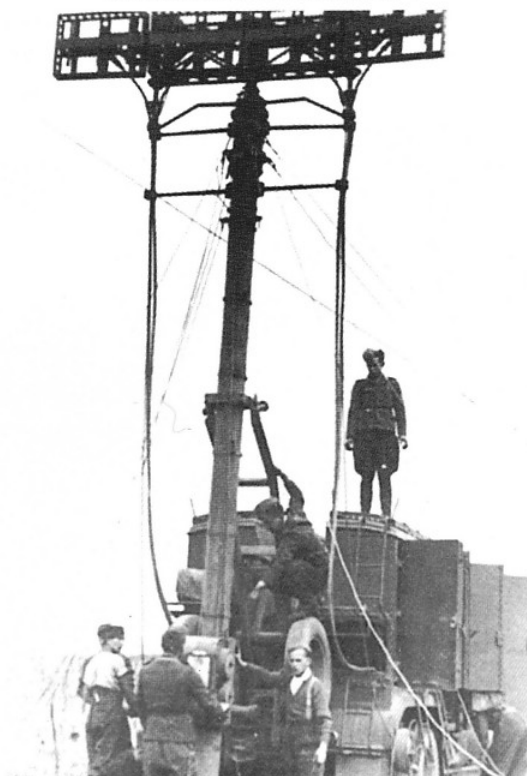
ケンプフ軍支隊は、第3機甲軍団、第11と第42の3コ軍団で合計9コ師団を擁していたが、内、第6、第7、第19の3コが機甲師団であった。この南方軍集団の攻略部隊には、第560重駆逐戦車大隊（ホルニッセ装備）、第503重戦車大隊（ティーガーI 装備）の他、アンチT-34の切り札として登場した、最新鋭のV号戦車パンターD型を装備する第39戦車連隊の2コ大隊も配属されていた。

第4機甲軍とケンプフ軍支隊に所属する9コの機甲、あるいは機甲擲弾兵師団は、作戦開始4日前の7月1日の時点の合計で、各種の指揮用戦車57輛、II号戦車39輛、III号戦車5cm短砲身型28輛、同長砲身型296輛、同7.5cm短砲身型48輛、IV号戦車短砲身型18輛、同長砲身

型321輛、ティーガーI 57輛、各種の火炎放射戦車41輛、T-34（鹵獲）25輛の合計930輛の戦車を装備していたという。

また、戦力増強のためこの「下顎」に配属された独立部隊は、ホルニッセ45輛、ティーガーI 45輛、パンター200輛を装備していたらしい。これに、上記の9コ師団の合計である930輛を加えると、総計1220輛となる。ただし、この数字には機甲擲弾兵師団所属の対戦車自走砲や、歩兵師団あるいは独立部隊所属の突撃砲や対戦車

南部軍集団が布設した無線中継センター





自走砲などは含まれていない。

なお、南方軍集団はSS第5機甲擲弾兵師団ヴィーキングと第17機甲師団を予備兵力として控置していたが、2コ師団で指揮戦車3輛、Ⅱ号戦車8輛、Ⅲ号戦車5cm短砲身型2輛、同長砲身型33輛、同7.5cm短砲身型17輛、Ⅳ号戦車短砲身型2輛、同長砲身型47輛の合計112輛の

戦車を装備していたという。

というわけで、予備の2個師団分をも含め、総計約2000輛（ただし機甲擲弾兵師団所属の対戦車自走砲、歩兵師団と独立部隊所属の突撃砲、対戦車自走砲を含まず）のドイツ軍戦車が、本作戰に投入されたのではないかと筆者は考えている。

ところで、ガブリと食い切る上顎と下顎に対して、正面を押え込む「力」も必要である。地味ながらこの役を果たしたのが、中央軍集団麾下、ザルムート上級大将の第2軍で、クルスク突出部西側外縁に、「押さえ」という任務の性格に合わせて、歩兵師団を主力とした第7と第13の2コ軍団、合計10コ歩兵師団を張り付けていた。

7月4日。昼頃から降り出した強い雨が上がった午後遅く、本来なら、翌5日が作戰開始日のはずにもかかわらず、南方軍集団戦区では、すでに戦闘が始まっていた。これは、第4機甲軍の前面に所在する小高い丘陵群を奪取するための戦いであった。砲兵観測所として絶好のこの場所を、ソ連軍に使わせないためである。なお、ドイツ軍が丘陵地帯を確保した後、ソ連軍が何度か奪還攻撃を仕掛けてきたが、それは成功しなかった。

5日未明、いよいよ砲撃が始まった。しかし、それはドイツ軍のものではなかった。何とソ連軍が、機先を制して阻止砲撃を開始したのだ。これもまた、情報漏洩の結果である。対するドイツ軍は、この砲撃に驚きはしたものの、こちらもまた、当初の予定どおりに明け方から砲撃を開始し、ここにいよいよツィタテレ作戰の幕が切

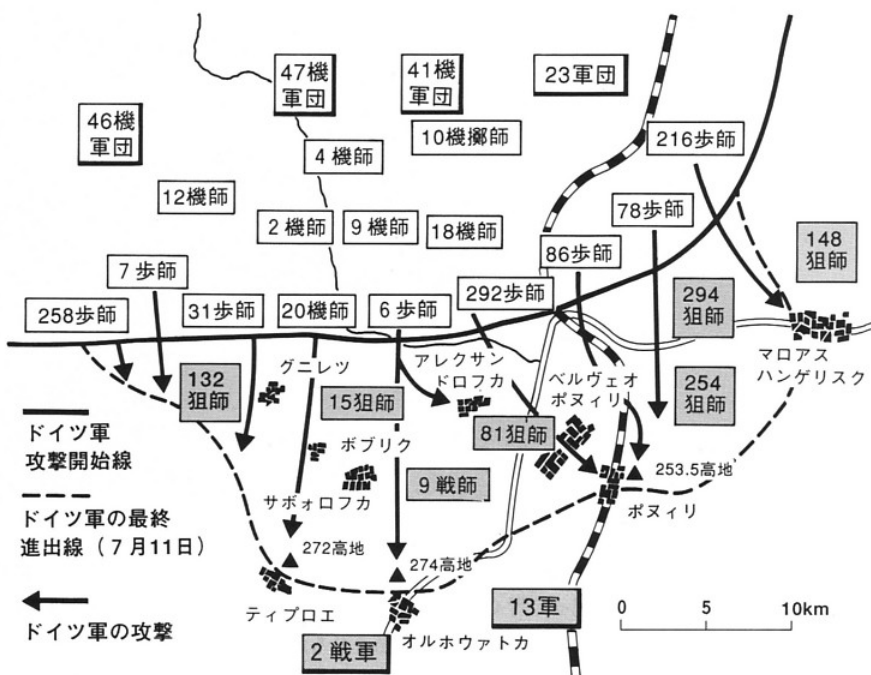


ソ連軍はドイツ機に対応するために新鋭Yak-9戦闘機を投入した

塹壕に隠れて砲撃を避けるドイツ擲弾兵



第9軍司令官ヴァルター・モデル上級大將



クルスク北部の戦線

って落とされた。

ソ連軍の先制攻撃は砲撃だけではなく。空軍は、多数の作戦機を各地のドイツ軍野戦飛行場に向けて先に放ったが、ドイツ軍のレーダー警戒網に捕捉され、ドイツ軍側の迎撃によって400機以上を撃墜されるという大損害を蒙ってしまった。この空戦の結果、ドイツ軍は、初戦での作戦地域の制空権確保に成功する。

出鼻でソ連軍に先手を打たれたとはいえ、制圧砲撃の後、いよいよドイツ軍攻略部隊の進撃が開始された。突出部南翼では、第4機甲軍とケンプフ軍支隊がよく下顎の役割を果たして、ソ連軍の防禦陣地を次々と突き破りながら、北へ向かってじりじりと進撃していた。

北翼の第9軍に比べて機甲戦力にゆとりのある第4機甲軍とケンプフ軍支隊は、各機甲師団に“バンツァー・カイル（楔型前進戦闘隊型）”を形成させて敵陣突破の「矢尻」として投入、ソ連軍側の必死の抵抗もあって相應の損害こそ蒙ってはいたものの、作戦初日で、場所によっては最大約20kmほども前進することができた。

しかしこれは、当初にドイツ軍が予定していた進撃速度より遅く、損害もまた予想外に大きなものだった。ところが、ソ連軍側もまた驚いていた。事前情報によって、あらかじめ何層にもおよぶ強固な防禦陣地を構築したにもかかわらず、それを深々と貫かれてしまったからである。

そこでソ連軍は、本来ならドイツ軍の攻勢を破砕した

後に、追い討ちをかけるための兵力として控置していたステップ方面軍の一部を、突出部南翼側の増援兵力として、早々と投入せざるを得なくなってしまう。

一方、突出部北翼で上顎を任ずる第9軍は、制圧砲撃の後に歩兵部隊による浸透突破を果たし、その突破口に機甲部隊を投入して、敵戦線の内側を深く切り裂いて行くという、ポピュラーな戦術を用いた。しかし、ソ連軍側の陣地構築は巧みで、準備砲撃によって与えた被害もそう大きなものではなく、しかも第9軍が約2500門の火砲を投入したのに対して、ソ連中央方面軍はその倍の約5000門の火砲で対抗してきた。

そのため、第9軍は南翼攻略部隊に比べて少ない機甲兵力を、予定よりも早い時期から戦闘に投入しなければならなかったが、これが期せずして戦力の「垂れ流し」となったばかりか、ソ連軍の頑強な抵抗も手伝って、戦車が予想外に大きな損害を蒙る遠因となった。

突出部を食い切ろうとしゃにむに突き進むドイツ軍、そうはさせじとドイツ軍に消耗を強いるソ連軍。ツィタデレ作戦始動後、約一週間が過ぎた頃、当初は割と出足のよかった下顎である南翼の進捗状況も、相当に衰えて牛歩のごとくとなっており、最初からつまづき気味だった上顎北翼に至っては、その前進がほぼストップしていた。

ソ連軍は、まるで自身が研磨材になったかのように、ドイツ軍という上顎と下顎の牙をすり減らす努力を続け



第653重駆逐戦車大隊所属のフェルディナント。長砲身8.8cm砲と前面装甲厚200mmの本車はクルスク戦で最強の存在であった

ていた。もちろん、研磨材は自らも次々と消費して行くが、牙もまたすり減って行く。

そしてこの頃になると、研磨材の補充よりも牙のすり減り具合のほうがずっと大きくなっていた。つまり、大きな予備兵力に支えられたソ連軍が、かなりの犠牲を払いつつも、ドイツ軍の目的を確実に頓挫させつつあったということである。

そんな戦いの日々の中、クルスクの南方にあるプロホロフカの街が、両軍の死闘の場となった。もし鉄道が走るここをドイツ軍が奪取できれば、東から送られてくるソ連軍の増援を阻止し、突出部南翼側の防衛態勢そのものを突き崩す機会が生じるかも知れない。

そこで、南翼側攻略部隊の中では最精鋭と目されたSS第2機甲軍団に、同地奪取の命が下された。しかし、ソ連軍第5親衛戦車軍が、すでにプロホロフカに到着していた。こうして、両軍はまるで2つの磁石が引かれ合うように、運命の地に向かって行ったのである。

SS第2機甲軍団は、南西からプロホロフカへと向かっていた。また、ケンプフ軍支隊の第3機甲軍団は、南から接近しつつあった。もしこの状況を放っておくと、第5親衛戦車軍は、2コ機甲軍団による挟撃を受ける恐れがある。

しかし、SS第2機甲軍団がプロホロフカへと急速に接近しているのに対して、第3機甲軍団はソ連軍の防衛線

バンターD型の砲塔を外した簡易型戦車回収車が、フェルディナントを牽引して後方に引き上げる





対戦車自走砲マルダーⅡやⅢ号戦車突撃砲は、クルスク戦において多大な戦果をあげている

に引っかかり、進撃速度が著しく遅くなっていた。そこで第5親衛戦車軍司令官ロトミストロフ中将は、まずSS第2機甲軍団を叩こうと決めた。命令一下、第5親衛戦車軍の戦車梯団が前進を開始する。ときに7月12日のことであった。

一方、SS第2機甲軍団は、西にSS第3トーテンコップフ、中央にSS第1ライプシュタンダルテ・アドルフ・ヒトラー、東にSS第2グス・ライヒという並びで、横隊を組んで進んでいた。前進にあたって、その進路上の陣地に対しドイツ空軍は空襲を加えていたが、ソ連軍側もI- ℓ -2シュトルモヴィーク対地攻撃機などを動員して、SS第2機甲軍団を空から襲った。

やがて、第5親衛戦車軍所属の第2親衛戦車軍団が、SS第2機甲軍団の東翼を進むSS第2グス・ライヒにぶつかってきた。一方、中央を進むSS第1ライプシュタンダルテ・アドルフ・ヒトラーに対しては、同じく第5親衛戦車軍所属の第29戦車軍団と第18戦車軍団が、正面から突っ込んできた。

ドイツ軍戦車は当初、接近してくるソ連軍戦車をアウトレンジで次々と打ち取って行ったが、ソ連軍戦車は損害にもめげずに梯団を組んでぐんぐん間合いを詰め、やがて戦場は乱戦状態となった。これは、一説ではレニングラードで捕獲したティーガーⅠを徹底的に分析したソ連軍側が、その強火力と重装甲を破る手段として編み出した捨身の戦法ともいわれている。

確かに、この戦法は厚い装甲を誇るティーガーⅠに対してそれなりに有効だった。ところが、当時のドイツ軍が保有していたティーガーⅠはごくわずかであり、主力の座は、相も変わらずⅢ号戦車やⅣ号戦車（就役当初に比べて、火力や防禦力こそやや強化されてはいたものの）

が占めていた。そして、Ⅲ号戦車やⅣ号戦車にしてみれば、火力、防禦力ともに優れた強敵のT-34やKVが向こうから突っ込んできてくれることで、かえってその装甲を打ち抜きやすくなったという説も唱えられている。

一方、西翼を進んでいたSS第3トーテンコップフは、戦線中央をSS第1ライプシュタンダルテ・アドルフ・ヒトラーに任せて、やや西に迂回しながら前進を続行した。しかし、ザドフ中将の第5親衛軍に所属する第31親衛戦車軍団と第33親衛狙撃軍団の攻撃によって、その進撃を阻止された。

ツィタデレ作戦に参加したドイツ軍戦車総数と同様に、このプロホロフカの戦車戦に参加した彼我両軍の戦車総数に関してもまた、さまざまな数字が発表されている。そのため、今でもいろいろにいわれているが、筆者としては、この戦闘が作戦開始後1週間あまりも経ってから戦われたことから、それまでの損耗分等も考慮に入れて、ドイツ軍戦車が150～200輦程度、ソ連軍戦車が750～800輦程度だったのではないかと思う。

つまり、ドイツ軍の1に対してソ連軍が7から8程度の戦車数の差があったということだが、この時期のドイツ軍戦車兵の練度は、いくつかの大きな戦いを経てきたことで、過去最高、つまり、開戦時よりも高かったのではないかと類推できる。

反面、ソ連軍戦車兵の方は、独ソ戦前半期の「限りない損耗」の状態にやっと終止符が打たれて、生き残った戦車兵達にも、それなりに戦争のためのテクニックが身に付きだした頃といえるが、それでも、その練度の差が、1対7～8という数の差を埋め合わせたと筆者は考えている。

さて、プロホロフカの激戦場も、日没と共に戦いが終

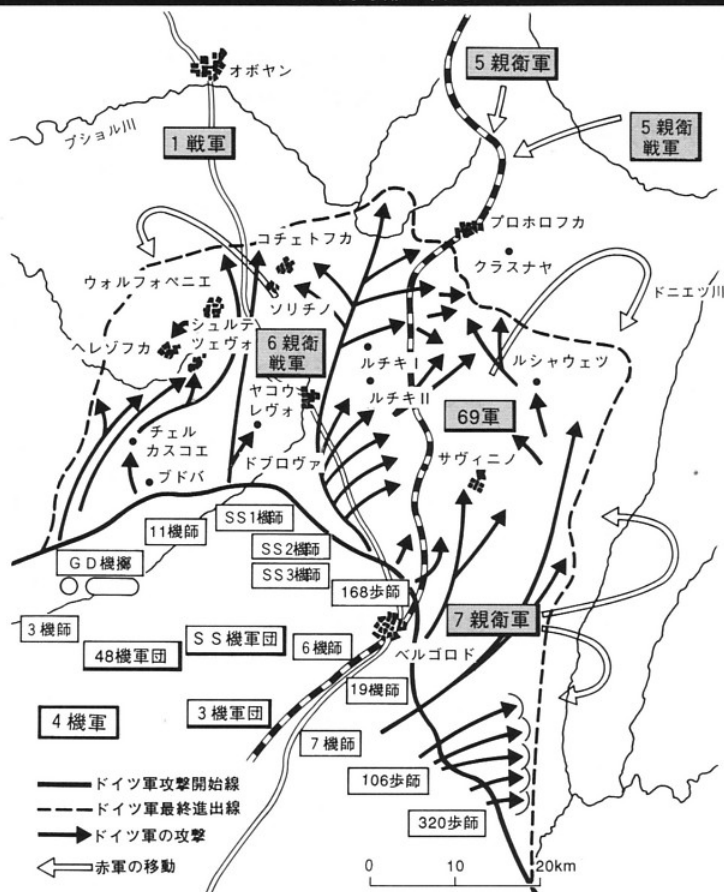


クルスク戦は、関東平野に匹敵する広大な戦域で戦闘が繰り広げられた

わった。なだらかなステップ（草原）で所々に小さな森が点在する一帯一面に、砲塔を吹き飛ばされたT-34、脱出途中で戦死した乗員がハッチにぶら下がったまま黒煙を上げているⅢ号戦車、ティーガーⅠの8.8cm砲による貫通孔を砲塔側面にいくつも晒して撃破されたKV-I等、彼我多数の損壊戦車が遺棄されていた。その光景は、まさに戦車の墓場であった。

この戦いでのドイツ軍とソ連軍の損害についても、さまざまな数字があって結論を出すのが難しい。だが、敢えて間違いを恐れずに判断を下すなら、ドイツ軍戦車の損害50～70輛、ソ連軍戦車の損害350～400輛といったところではないだろうか。キル・レシオで戦闘の行方が語れるならば、これは明らかにドイツ軍の勝利であった。

クルスク南方部の戦況



SS第2機甲軍団長バウル・ハウサー大將（上）と第4機甲軍司令官ヘルマン・ホト上級大將（下）





しかしこの戦いは結局、その後のツィタデレ作戦を成功へと導くターン・テーブルとはならなかった。この戦いの2日前の7月10日、地中海戦域では連合軍によるシチリア島上陸「ハスキー作戦」が敢行されていた。

また、ソ連軍はこのツィタデレ作戦を牽制するため、プロホロフカの戦いと同じ12日に、クルスク突出部に食い込んだ「上顎」である中央軍集団第9軍に対する攻勢、クツーゾフ作戦を始動している。そしてソ連軍の思惑通り、このクツーゾフ作戦によって、第9軍は防戦に回らざるを得なくなり、上顎としての機能をほとんど失ってしまった。

こんな戦況の中、13日、ついにヒトラーは作戦の中止を示唆する。彼は、連合軍が島嶼部とはいえ本国に手をかけたことで、「根性なし」のイタリアが戦争から脱落するのではないかと危惧しており、ツィタデレ作戦参加

部隊のいくつかを、イタリアに派遣しようと考えていたのである。

時間が過ぎ、歴史上のさまざまな事実が判明している今だからこそ、ツィタデレ作戦の無駄や失敗も詳細に見えてくる。しかし当時の判断は、ドイツとソ連の双方が、両者ともに「勝った」と思っていたようである。

ドイツは、「ソ連軍に大打撃を与えたのだから、例え攻略目標が達成できなくとも作戦はそこそこ成功した」と判断しており、ソ連は「ファシストの侵略的攻勢目標を挫折させ「母なる地」を守り抜くことができた」と考えていたのだ。

だが、どちらが正しかったかということは、その後の地中海戦線の状況と東部戦線の戦況、さらには、戦争全体の行方を見て行けば、ある程度おわかりいただけるのではないだろうか。

長砲身砲の搭載により、IV号戦車G/H型はT-34/76に互角以上の戦いが可能となった



第11機甲師団に所属する大隊本部付オートバイ